

《一》次の随筆(エッセイ)を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

東京に住んでいたころ、私はよく決まった用事もなく神保町に足を運んでいました。とりあえず適当な古書店に入ってみるのです。ここでは古書を介して、自分が予想もしなかった世界と出会うことができます。古書店ではすでに絶版となった本が溢れており、現代の流行とまるで違う時間が流れているようです。情報化社会の中で流行ばかりに流されそうになる時、時代を越えて大切にすべきものを確認するためにも古書店は有効なのです。

ほかに、神保町にはレコード店も多くあるため、¹古[□]西[□]の名盤と出会うことができますし、浮世絵や美術作品を取り扱う店も存在しています。こうした店に入り浸りながら、せわしない日常と異なる時空間で遊ぶことが、私にとって最高の楽しみでした。神保町にはあらゆる専門書があり、ネジだけの専門書、マンホールだけの専門書など、奥深さを持つあらゆる古書がありました。どの世界にも進歩の歴史があり、本質を突き詰めていけば宇宙の原理原則にまで通じていくのではないか。そうした無限の可能性を古書店の森の中でいつも感じていたものです。

こうしたことはいわば、いわゆる「^A普通の寄り道」です。しかし私は、もっと「無意識的な寄り道」も好んでやっていました。無意識的な寄り道とは、あえて迷子になってみることです。例えば、目の前に到着したバスに、行先も確認せずに乗り込んでみて、適当な場所ですで直感的に降りてみます。するとその場合は自分が意識的に寄り道した場所と違い、勝手に連れて行かれた場所となります。正式な形で、安全に迷子になれるのです(風変わりな言い方ですが)。もし山や²樹海でこうした行き当たりばつたりの行動を取ると死んでしまう可能性がありますが、都市部であれば何とかして家に帰ることができるので安心してください。それでも意識的に迷子になることで、自分の野性的な勘や、普段使っていない感覚を発揮することができます。

当然ながら、どの方向に進めばいいかわからず途方に暮れながら道を歩く羽目になります。しかしそうすることで、あたかも海外で一人旅をしているような感覚にもなります。そうしたこと自体が、身体感覚としてとても新鮮なのです。私たちはどうしても何かしらの情報を先に取りこんだ上で、頭の中で予想しながら行動することが多いのですが、そうすると自分の頭の中にある情報にしか出会えなくなります。その点、迷子として歩いていると、あちこちに注意しながら移動することになります。結果、こざわりとセンスのあるお店や、面白そうな本屋さんに出会う確率が上がり、それらひとつひとつに對する感動も深くなります。あまりの感動に、店主さんに話しかけてしまうかもしれません。こんな素敵な本屋さんには出会ったことがない、と。そうした新鮮な出会いは、互いにとって幸福なことです。もちろん、いつも興味深い風景に出会えるわけではありません。そうした感動が何も起きないことはよくあります。ただただ困りながら疲労するだけのこともあります。それはそれとして後で振り返ると楽しい思い出になるものです。あるいは適当なバスに乗り込んで降りてみると、ただの住宅街だったということもあります。そういった時には、あまりキョロキョロしたりせず、さもその町の住人になったような意識で歩き続けることがコツです。

まったく知らない住宅街の中で、あたかも目的地がはつきりしているかのような歩き方をすると、どんな平凡な街並みでも新鮮な感覚を抱くことができます。これは、先ほどの迷子とも少し異なる感覚です。

脳^Bの仕組みから解放され、子どものような自由な境地を得るための、^C感覚のリセット行為のようなものです。

ミステリーツアーという言葉をご存じでしょうか。目的地が伏せられた旅行のことです。実際にこれを企画している旅行会社もあり、意外に好評だと聞いたことがあります。そうした旅も、先ほどのリセット行為に通じるところがないでしょうか。あらかじめ目的地がわかっていると先回りして情報を検索してしましますが、^Dそうした無意識の行動自体が自分自身を縛っていることがあるのです。その点ミステリーツアーでは、事前情報をあえて得ないことで、想像を超えた体験ができます。それこそが旅の本来的な³醍醐味だろうと思います。瞬間瞬間の思考や即興的な判断を繰り返しているうち、普段使わなかった感覚が開かれてきて、世界が違って見えるようになるのです。

そんなミステリーツアーと異なり、迷子に準備は必要ありません。日本が安全な国だからこそ提案できる、奇妙な遊びだとも思います。私も独身時代にはよく意図的に迷子になったものでした。そうすることで、遊びながら東京の地理を肌で学ぶこともできました。一人で休日を過ごす予定のある方には、ぜひ迷子になってみることをおすすめします。乗ったことのないバスや電車をぜひ当てずっぽうに利用してください。みずから迷子になり、不安になり、途方に暮れてみてください。きっと未知の感情や心理が湧き起こってくるでしょう。また、他人の存在のありがたを感じ、ちよつとした優しさに涙が出る場合だってあるかもしれません。私も、知らないお婆さんに駅までの道を教わりながら、地元の商店街で売っている唐揚げをお土産として渡され、涙が溢れたことを昨日のこのように思い出せます。迷子においてはそのようにしていれば、弱い自分を発見するのです。

やがてそのうち、自宅へ帰る時間になるでしょう。今度は帰巢本能を働かせる番です。そのために必要なのは洞察力と観察力、嗅覚や第六感などを最大限に働かせる、いわば強い自分です。

「迷子」というひとつの行為の中で、^E弱い自分と強い自分とが固く手を結ぶこと。新しい自分が立ちあがってくるのは、そのような過程にあるのだと思うのです。まずは、いつもの帰り道を違うルートで帰宅してみてはいかがでしょう。

問一 二重傍線部 1 「古□□西」の空欄に漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。

問二 二重傍線部 2 「樹海」、3 「醍醐味」の意味を次の中から選び、それぞれ符号を書きなさい。

2 「樹海」					3 「醍醐味」				
ア	入り江や河口付近の木々がたくさん生えている所	イ	海藻がまるで樹々のように繁茂している海	ウ	ビルが林立しているコンクリートジャングル	エ	砂漠の中で水がわき、草木が生えている緑地	オ	森林が広がり上から見ると海のように見える所
ア	新鮮さ	イ	複雑さ	ウ	奇妙さ	エ	面白さ	オ	大胆さ

問三 傍線部 A 「普通の寄り道」とありますが、筆者が言っている「普通の寄り道」とはどうすることですか。六十字以内で説明しなさい。

問四 空欄 B に入れるのに最も適切な表現を次の中から選び、符号を書きなさい。

- ア 見知らぬ人ばかりの雑踏の中で知人に会ったような
イ 言葉のわからない海外で、一人旅をしているような
ウ スマホの地図と周辺の様子とを見比べているような
エ 通い慣れた通学路を友人と一緒に歩いているような
オ すべての通行人を観客と見立てて役者になるような

問五 傍線部 C 「感覚のリセット行為」とはどうすることですか。五十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部 D 「そうした無意識の行動自体が自分自身を縛っている」とはどういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部 E 「弱い自分」とありますが、筆者はそれをどういう自分として説明していますか。解答欄に合うように六十字以内で説明しなさい。

《二》次の文章は、山口裕之『「みんな違ってみんないい」のか？ 相対主義と普遍主義の問題』の「はじめに」の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

昨今、「正しさは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といった言葉や、「現代社会では価値観が多様化している」「価値観が違う人とは結局のところわかりあえない」といった言葉が流布しています。このような、「人や文化によって価値観が異なり、それぞれの価値観には優劣がつけられない」という考え方を相対主義といいます。「正しさは人それぞれ」ならまだしも、「絶対正しいことなんてない」とか、「何が正しいかなんて誰にも決められない」といったことさえ主張する人もけっこういます。

こうしたことを主張する人たちは、おそらく多様な他者や文化を尊重しようと思っているのでしょう。そういう善意はよいものではありますが、はたして「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」という主張は、本当に多様な他者を尊重することにつながるのでしょうか。そもそも、「正しさ」を各人が勝手に決めてよいものなのか。それに、人間は本当にそれほど違っていいのかも疑問です。

たしかに、価値観の異なる人と接触することがなかったり、異なっているにもかかわらず両立できるような価値観の場合には、「正しさは人それぞれ」と言っているても大きな問題は生じません。たとえば、訪ねることも難しい国の人たちがどのような価値観によって生活しているても、自分には関係がありません。またたとえば、野球が好きな人とサッカーが好きな人は、スポーツのネタでは話が合わないかもしれませんが、好きなスポーツの話さえしなければ仲良くできるでしょう。サッカーが好きなのは間違っていて、すべての人は野球が好きでなければならぬ、なんていうことはありません。

こうした場面では、「人それぞれ」「みんなちがってみんないい」でよいでしょう。しかし、世の中には、両立しない意見の中から、どうにかして一つに決めなければならない場合があります。たとえば、「日本の経済発展のためには原子力発電所が必要だ」という意見と、「事故が起こった場合の被害が大きすぎるので、原子力発電所は廃止すべきだ」という意見とは、両立しません。どちらの意見にももつともな点があるかもしれませんが、日本全体の方針を決めるときには、どちらか一つを選ばなければなりません。原子力発電所を維持するのであれば、廃止した場合のメリットは捨てなければなりません。逆もまたしかり。「みんなちがってみんないい」というわけにはいかないのです。

そんなときには、どうすればよいのでしょうか。「価値観が違う人とはわかりあえない」のであれば、どうすればよいのでしょうか。

そうした場合、①現実の世界では権力を持つ人の考えが通ってしまいます。本来、政治とは、意見や利害が対立したときに妥協点や合意点を見つけたためのはたらきなのですが、最近では、日本でもアメリカでもその他の国々でも、権力者が力任せに自分の考えを実行に移すことが増えています。批判に対してきちんと正面から答えず、単に自分の考えを何度も繰り返したり、論点をずらしてはぐらかしたり、権力を振りかざして脅したりします。

そうした態度を批判するつもりで「正しさは人それぞれだ」とか「みんなちがってみんないい」などと主張したら、権力者は大喜びでしょう。なぜなら、もしもさまざまな意見が「みんなちがってみんないい」のであれば、つまりさまざまな意見の正しさに差がないとするなら、選択は力任せに行うしかないからです。「絶対正しいことなんてない」とか「何が正しいかなんて誰にも決められない」というのであればなおさらです。決定は正しさにもとづいてではなく、人それぞれの主観的な信念にもとづいて行うしかない。それに納得できない人とは話し合っても無駄だから権力で強制するしかない。こういうことになってしまいます。

つまり、「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」といった主張は、多様性を尊重するどころか、異なる見解を、権力者の主観によって力任せに切り捨てることを正当化することにつながるのです。これでは結局、「力こそが正義」という、困った世の中になってしまいます。それは、権力など持たない大多数の人々(おそらく、この本を読んでいるみなさんの大部分)の意見が無視される社会です。

では、どうしたらよいのでしょうか。

よくある答えは、「科学的に判断するべきだ」ということです。科学は、「客観的に正しい答え」を教えてくれると多くの人は考えています。このように、さまざまな問題について「客観的で正しい答えがある」という考え方を、普遍主義といいます。探偵マンガの主人公風に言えば、「真実は一つ!」という考え方だといってもよいかもしれません。先ほどの相対主義と反対の意味の言葉です。「価値観が多

様化している」と主張する人たちでも、科学については普遍主義的な考えを持っている人が多いでしょう。「科学は A」などという言葉はほとんど聞くことはありません。

そして実際、日本を含めてほとんどの国の政府は、政策を決めるにあたって科学者の意見を聞くための機関や制度を持っています。日本であれば、各省庁の審議会(専門家の委員会)や日本学術会議などです。「日本の経済発展のために原子力発電所は必要なのか」「どれぐらいの確率で事故が起こるのか、事故が起こったらどれぐらいの被害が出るのか」といった問題について、科学者たちは「客観的で正しい答え」を教えてくださいに思えます。

ところが、実は科学は一枚 B ではないのです。科学者の中にも、さまざまな立場や説を取っている人がいます。そうした多数の科学者が論争する中で、「より正しいような答え」を決めていくのが科学なのです。それゆえ、「科学者であればほぼ全員が賛成している答え」ができあがるには時間がかかります。みなさんが中学や高校で習うニュートン物理学は、いまから三〇〇年以上も昔の一七世紀末に提唱されたものです。アインシュタインの相対性理論や量子力学は「現代物理学」と言われますが、提唱されたのは一〇〇年前(二〇世紀初頭)です。現在の物理学では、相対性理論と量子力学を統一する理論が探求されていますが、それについては合意がなされていません。合意がなされていないからこそ、研究が進められているのです。

最先端の研究をしている科学者は、それぞれ自分が正しいと考える仮説を正当化するために、実験をしたり計算をしたりしています。つまり、科学者に「客観的で正しい答え」を聞いても、何十年も前に合意が形成されて研究が終了したことについては教えてくれませんが、まさしく今現在問題になっていることについては、「自分が正しいと考える答え」しか教えてくれないのです。ある意味では、「科学は A」なのです。

そこで、たくさんの科学者の中から、自分の意見と一致する立場をとっている科学者だけを集めることが可能になります。東日本大震災で福島第一原発が爆発事故を起こす前までは、日本政府は「原子力推進派」の学者の意見ばかりを聞いていました(最近また、そういう時代に逆戻りしつつあるような気がします)。アメリカでもトランプ大統領(在任二〇一七〜二〇二一)は地球温暖化に懐疑的な学

者ばかりを集めて「地球温暖化はウソだ」と主張し、経済活動を優先するために二酸化炭素の排出の規制を緩和しました。権力を持つ人たちは、もつと直接的に科学者をコントロールすることもできます。現代社会において科学研究の主要な財源は国家予算です。そこで、政府の立場と一致する主張をしている科学者には研究予算を支給し、そうでない科学者には支給しないようにすれば、政府の立場を補強するような研究ばかりが行われることになりかねません。

このように考えてみると、科学者であっても、現時点で問題になっているような事柄について、②「客観的で正しい答え」を教えてくださいるものではないさそうです。③ではどうしたらよいのでしょうか。自分の頭で考える? どうやって?

この本では、「正しさ」とは何か、それはどのようにして作られていくものなのかを考えます。そうした考察を踏まえて、多様な他者と理解し合うためにはどうすればよいのかについて考えます。ここであらかじめ結論だけ述べておけば、私は、「正しさは人それぞれ」でも「真実の一つ」でもなく、人間の生物学的特性を前提としながら、人間と世界の関係や人間同士の間の関係の中で、いわば共同作業によって「正しさ」というものが作られていくのだと考えています。それゆえ、多様な他者と理解し合うということは、かれらとともに「正しさ」を作っていくということです。

これは、「正しさは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といったお決まりの簡便な一言を吐けば済んでしまうような安易な道ではありません。これらの言葉は、言ってみれば相手と関わらないで済ますための最後 C 牌です。みなさんが意見を異にする人と話し合った結果、「結局、わかりあえないな」と思ったときに、このように言うでしょう。「まあ、人それぞれだからね」。対話はここで終了です。

ともに「正しさ」を作っていくということは、そこで終了せずに踏みとどまり、とことん相手と付き合うという面倒な作業です。相手の言い分を受け入れて自分の考えを変えなければならぬこともあるでしょう。それでプライドが傷つくかもしれません。しかし、傷つくことを嫌がっているのは、新たな「正しさ」を知って成長していくことはできません。

最近、「正しさは人それぞれ」と並んで、「どんなことでも感じ方しだい」とか「心を傷つけてはいけない」といった感情尊重の風潮も広まっています。しかし、学び成長するとは、今の自分を否定して、今の自分でないものになるということです。これはたいへんに苦しい、ときに心の傷つく作業です。あえていえば、成長するためには傷ついてナンボです。若いみなさんには、傷つくことを恐れずに成長の道を進んでほしいと思います(などと言うのは説教くさくて気が引けますが)。

問一 二か所の空欄Aに共通して入る最も適切な五文字を、本文中から抜き出して書きなさい。

問二 空欄Bに適切な漢字一字を入れ、「組織・集団などが一つにまとまっております」とありますが、それはなぜですか。七十字以内で説明しなさい。

問三 空欄Cに適切な漢字一字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

問四 傍線部①「現実の世界では権力を持つ人の考えが通ってしまいます」とありますが、それはなぜですか。七十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部②について、「科学者」が『客観的で正しい答え』を教えてください。百二十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部③「ではどうしたらよいのでしょうか」とありますが、この問いかけに対して筆者はどうすべきだと考えていますか。六十字以内で説明しなさい。

〈四十点〉

《三》次のI・IIの問いに答えなさい。

I

次の①～⑮の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 事件の原因についてセイサが必要だ。
- ② ピアノの素晴らしいエンソウに心打たれた。
- ③ 経済シヒョウを参考に株を買う。
- ④ この空港に鹿児島行きの飛行機がシュウコウする予定だ。
- ⑤ 一族のシュクガンは思わぬ形で成し遂げられた。
- ⑥ 実情も知らない者が脇からあれこれ意見するのは愚のコツチヨウだ。
- ⑦ 審判がアウトをセンコクする。
- ⑧ ドローンをソウジュウする。
- ⑨ 食料を十分にチヨゾウする。
- ⑩ 他人に口外しないようゲンメイが下った。
- ⑪ 反省のベンを述べる。
- ⑫ その絵のラクサツ価格は目の飛び出るような額であった。
- ⑬ 彼はクラスの委員長としてのセキムを全うした。
- ⑭ ケイテキを鳴らす。
- ⑮ 「ユウショウの下に弱卒なし」とたたえられた最強軍団。

II

次の①～⑤の空欄に漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

- ① いくら危機に直面しても社長は泰□□若としていた。
- ② 合格の秘訣は、□□貫徹の姿勢を崩さないことです。
- ③ 彼の厚□□恥な態度には、あきれてものが言えない。
- ④ 最後の最後でミスをして、まさに□竜□晴を欠いた。
- ⑤ 一心に絵筆を動かす間は、□鏡□水の心境であった。

〈二十点〉

《一》

古

西

問二

2

3

問三

受験番号

得点

問四

問五

問六

問七

《二》

問一

問四

5字

問二

一枚

問三

最後

牒

60字

自分。

一小計

50字

50字

70字

問五

二小計

120字

問六

三小計

60字

I 《三》

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

II

① 泰

若

②

貫徹

③

厚

恥

④

竜

晴

⑤

鏡

水

一	書名 ことばのくすり 感性を磨き、不安を和らげる33篇 著者名 稲葉俊郎 出版社名 大和書房 発行年度 2023年
二	書名 「みんな違ってみんないい」のか？ 相対主義と普遍主義の問題 著者名 山口裕之 出版社名 筑摩書房 発行年度 2022年